

# 肘歴通信 第十一號

## 「地蔵倉」のこと

一面紙切れが数限りなく結びつけてある  
岩に虫の喰うたような穴に通した  
縁結びの禁厭の紙である  
聖地・地蔵倉。  
(禁厭→おまじない)

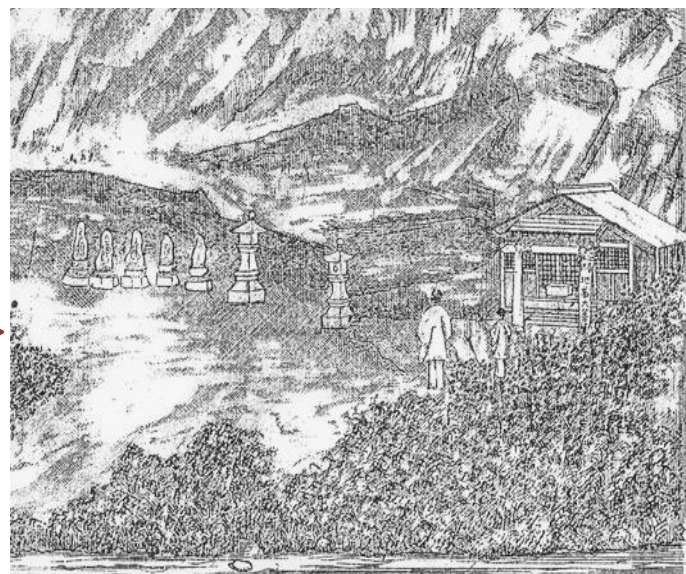
1200 余年前の開湯伝説に語られる、

肘折開祖 源翁が、地蔵権現の化身である老僧に導かれ、  
肘折の由縁を教えられた地です。

古くから縁結びの御利益があると信仰されており、  
天保5年4月には新庄藩主 戸澤正胤も参詣しています。

明治28年のガイドブックには、こう紹介されます。

長さ十五六間 深さ十五尺 高さ亦  
之に合ふ岩窟中、地蔵堂を立て地蔵尊  
を安置し、堂の前には六個の石地蔵を配  
列す。頭を上ぐれば岩窟の細き穴あり、其  
数幾千なるを知らず、世俗これを縁結び  
の穴と咏い、少年少女皆その穴を探り、紙  
を結びて良縁を得んやと祈る。その巖の上  
にまた一つの岩窟あり、奥院と名付く。  
是れ地蔵尊の出現たる所なり。地蔵堂の  
上に當り孕松と名付くる松が三株あり。



明治30年に描かれた地蔵倉の絵図

しかし、地蔵倉本堂は**明治36年に全焼**し、  
その後12年間、地蔵倉は仮設の小屋となります。

橋(永代橋)の袂で、  
本道から真直行けば、  
杉かこひの水車小屋があり  
柱に「地蔵倉参詣通路」  
と札打ってある

草の小道を辿れば、  
真下河中に大岩石がある

溪を過ぎて一角を曲がると  
道は二路となり、  
真直ぐ山の根を行き、  
一曲りすれば地蔵堂である



明治43年のガイドブックと、仮設の地蔵倉写真

大正3年に本堂再建が計画され、両羽銀行(山銀)に資  
金を借りて資材を購入。



巖奇ノ倉蔵地 (泉温折肘郡上最縣形山)

大正4年7月に

地蔵倉が再建されました。

今も内部に残る寄進札には、当  
時の温泉組合長・地区総代・密  
藏院が書かれており、

この時、明治の廃仏毀釈で首を  
落された六地蔵も修復され、  
私たちが良く知る

今の地蔵倉の姿となります。

肘折歴史研究会